文化九年臘月大寒之日写功畢

手爾於葉秘書　為家御抄
春樹顕秘抄　定家御抄
将明卿入木道之傳

冷泉家御秘傳

和歌式手尓於葉抄

杉氏蔵書

凡和歌ハ手尓於葉をもて肝要とし然るに心の始
詠るゝハ必て深きおもひあらはしといへともそれよりゆるし侍る

第一とまりて尓も十七字中

いつ　いつち　いつに　いつ迄　いつまてか　いつそ　いつそし

か　かハ　かを　たり　たき　なよ　なと

なそ　や　いつく

らんとうきりくん中ハ才筆の詞にはしてハもちゆ

例ハたとへハ

古今秋上　藤原おきかぜ秋の花のちりかたをよめる
今とはとめりきめぬ物と秋の花いつの人まにうつろひぬらん
秋下　仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる
濡てほす山路の菊の露のまにいつかちとせを我は経にけん
新古今大納言　題しらず
いりませんかたをうきよの菊をかりこ秋のとまりやいつくなるらん
古今三條の屋にかりすまひけるによめる
冬の花いまさく宿は雪の所にふりしけは
寛平の御時きさいの宮の歌合の歌
有明にそれとも見えぬ花松はほのかにたてる鴫をいつちけん
新古今　伊勢にまかりける時よめる
鈴鹿山うき世をよそにふりすてていかに成行我身なるらん
古今　東の方より京へまうでくとてよめる
山かくす春の霞そうらめしきいつれ都のさかひなるらん
新古今　水無瀬にて十首歌奉りし時
武蔵野やゆけとも秋のはてそなきいかなる風の末に吹らん
若菜
春山のおくもきまて吾あるかたにいさよふ雪の消とすれ
古今秋の歌とてよめる
雨降と露ももらしを笠取の山はいかてかもみち染けん
新古今　題不知
定なく時雨る空のむら雲にいくたひおなし月を待らん

朱鳥五年九月紀伊国行幸時
白浪の濱松かえの手向草幾世まてにか年の経ぬらん
讀不知
教わりなきおもひなきあふなおもひたつ波のうへにもかよはん
古今　亦ゝ
瀧つせのなかにも淀は有としも何はよみのせきとゝめけん
亦ゝ
衣手に山風吹て寒き夜を君まち侘ぬいかにしてまし
是貞のみこの家の哥合
秋風に吹乱ぬる草の葉の露の玉章をとひきまほしき
朱雀院女郎花合
女郎花秋の野風にうちなひき心一つを誰によすらし
おほ沢の池のかたに菊植たるをよめる
一本とおもひし花を大沢の池の底にも誰か植けん
人の家の桜をよめる
おもひ立しきあるを名もの立まんはゝ世にもあらし
春の哥天下山の桜をよめる
春霞なにかくすらん桜花ちるまをたにもみるへきものを
新古今
むかしより絶せぬ河の末なれやよとむもなきを何頼みけん
古今
中ゝにせしも橘に桜にもなとそ鳴絶ぬらん

新古今西行法師人々に百首よませ侍りけるに
あもきなしはかなき花のちりもうき春を惜しむに随分をし
林宗に世の名は立てそなたにみえても花の咲きにさそふれ
水のほとりに掛ける花のさかりをとよめる
年を経て花の後に散る水にもかからぬ墨跡とよめる
雪の木にかかりしこそとよめる
東主は花やつもりけん日やむかしの梢にこそあれ時
古今東山守業をとはせし的
兵の歌に花鳥を日影の御子まつる人のけん
落花月咲く桜とこそ
象鳥のとまりしを西行にかへりしや梢にかかりて梢に

不如是五音の是をもはたくしても治定し
第二治定して定めけり
是をさらんと云治定したるにてさるとて
思ん　さん　神ん　せん　さん　まん　はれなり
第三なるてはかくて定めけり
是を加一の位名とす
そ　を　に　た　て
指遣
呂の音の末の音を用あれいたりたりそ初はちらん
又ことは忘
本治のさやのけしきもしは はしの人をさとひてぞもとん

うかん此までは桜の花とよむべきなれ
ば桜ならでちるらし一字万か文字に傳へるもの
古今序　歌しは
思ひ深く保てし　わすれは　詞あまりて心の花とこそいへ
其山桜をそへてよめる
花のかやく人み詠れ　桜花をたかに折て家つとにせよ
第四　のつてもやるかな
第五　侍うらむらしの事
第六　ゆうくこうしの事
第七　家をまたかしこきうらひりしことをみて家とこそ
ふをみ字　是は一の風みて候り
第八　らし

第九　あらめ
第十　めれ　は　めり
第十一　まし　と　字　きる
第十二　へき　と　ふ　か　哉
右十二もじのか文成べし
第十三
以て仮名を照したならんと事詠みならひて
思ふ何の何のかの言の葉の文字上よんは
つねと云ならしたる詞の何のかみ余情有る是を
云ふのまへてと云
はみえをのまえ　詠　たみ

此九字よみしとよむ事を合せてかへて

古今

秋の色のいろいろしかは里はあれし咲るまさる花のこゝろを

我か宿の花咲きまさると人のまたみえまさるを

露けしや咲る花したかひてうつろふものゝ人のこゝろの花にそありけん

人をとらり計り時

いつまてよそにも色もあらましかは果なきて侍りけむ

意

桂のかきまた咲のあやにたへもなく人の立しめれ

物名

野辺の中に梅はなけれと鶯とのをなく鳴くらん

春

あはれには松の茅をいへてちる物名の家に来らる

、

海士の住里のさとあまのかるもと人の心に

春かすみ立ちなかくれそ我方に人のあまてらる

古今之

山の井のあさき心も我思はぬ物の人のこゝろ

春

思ひ染し深くし折れは消あへぬ霜の花とみるらん

梅花の色かとみて

冬されはのとけき夜のねふりに声ゆかしくものせくらん

恋

秋風に句をならへてしるもいなふ人の心の定なきに

雑

花ありて浮世の中と思はん人のみやへ遊しけるらん

秋

霧立て一しほゆかしき庁国の都の家にかけし春

、

秋萩にうらみをもれは岸陰の下とおみけ麻のゆかりん

ちりけれしかもの川水に錦と見えて昔しのふ人気をそふらん

右十三ケ條と下知の手番者次第の事

あしきとき人のまり作者詩てもみきて書

一ゆかしく人々やうると桜をみて詩歌をもよくいたすへし

古今ノ夜

なかくて春は三へだはばらきん露ぬのにほひをそへし

夏

春くて花はいか月夜霜立てくら呼すしおもし

辛子作前会の内

見る人も山里の桜をおのちらしし桜も咲へし

或日は花のちらしいかのちよも咲へらし

大ゆもかわの花お来し

寺二をとなすけたせ何毎の路あり五高舟

の者をしおかへ手習
うまず怠らず此世中にうつ
我名は花を咲かせ立 調は朝にむかれ
異見を物を学べ 隣を友と 人を友とせよ
世の中つらつらの人よって見よ
仲の良き世の友なりけり
きちと考え 考え 縁は子ども
庭に月も夕暮にながめしても人に語りき
桜の咲きたるをみかしも人に語りたり
これ花のさかりにしるとうかきしかれと手習しかるべき
人も見よし当国の花をみのかたりを咲きまし候

此の上に法華の君がにて いとわけあるべし
為になる事は月に一度 私を見なと見せて君を
知らん 心をうつしと申すべし
主すと日津ほか その字あり 是を下知のそとを
人おとなしく まことに 北礼し
そと やと の清め かよいけり
在所帰りをよめる
其庭立を見まわりしは我が国に住むやあらん
むさしの原でも諸国まで都の住みやせよ
是はそのたびやしき彼に下手な事しさし

みやこは花ぞ咲ぬる吟味あるべし
歳暮ニ者子日のねりこれ千代いそ祝はる　神之御心
歳暮にわか菜摘て万代を祈りのいのちをまもりし
そとのと為じ作り添ゆべし
きのふまで年首とし今日川の中に稲家にいれよと村の者の
わかきには神を松の花あり見や家に呼ぶの事
且の暮　尼そ為く　器の時　箸を呼
ゆたかなる作りのとし子供は一年の内に鏡の家
正月　鏡ある五歳一し
歳暮
歳暮とて　白ふ山里にいりまかに言をも
山家三人むかしの家をたよりに新をかて子く
是皆の分を大切し心は深くしと
花じあし　とあしなるの　出家のす
新年
古めきもかりと年村の年の末　私法の時
東路の旅路の雨橋かけてのとおけると名人のなき
是はそとのゆかて為ふそそと祝ふし
をそ　とは　ゆえ　そそ
是皆の門外かへ家とや
花といふ　ゆえ家あり
そのよ　三の京かりけり

とそ とう とよ とよのあかり 又
君かへて 君かけり 君か代よ 聞し
云替りそあり不知はあれ
此殺して殺す河原としても紫をすむべき水の流れそ
豆と云ては 家と毎すし
人は四も亡ひ候ハぬそむかしの身の白ひ声
青柳の糸よりかゝる春の風あそこそのはにほひ声
庭々川本のめも枝の声よれハちあき国もむそもう声
日本の鳴つる声へ日見ハ声きと空ハ山の端見え声
花の音を風の供りにたくへても声きとまる人なけれ
桜もる花の林いかなる声そ有して流る水に声

今の方に空々まかりて足元の字を今は呼ぶ
松き空と月夜さやかに三つ二つの風の声まそ聞かん
春は?る時を松の花の春まき心は家を捨る
雨海は空なるものの中みだれり父の神まくへてこそ
名にし此の木の家の落ちるを法土の有りせるを身をもと
神さびの山を高見 松みれば 立田川まで 都はたえむ
是なる其を分すぐれ 化にも家一根にあれんのでこそし

第三 春を首れす 三青丹の青よ 常しへし
示 け世てれへ 今へ見へ
松とあは 人をも世を 時と世を 田とも ある

月ぞ抱られ　是迄となをいめ　元なた〳〵迄ね
如是我聞の月のよにもはじめよも有りし
伴の分に
らし　恋に　なよきた　まきし　り
竹すきし衣そし市にに?しつほかいそん余むすりれ哥
鹿なを立こみ?りし?屏山玉ぶ成とはいりにふりん
月なを月よ　恨んとを?しつ
衣をを根果?すた　如是菩薩
いひおんなを有
其もまき秋の夢も限あるとまうし終らんみとのなを
恋もおし?月も恋?の果の?を??よの夢し?子なを
それまでへとこともなべとかぬほなり
是作り?う?し
ちの洞府を?滝つ白河ハ君か代まてしの名も社有家れ
如是滝津のはふ有?
なきと云時ハ
けさ　ありゝや　なめ　らも　なめ　めでた　つき　ゆめ
つめ　まりゝや　なとし有りし有上
鉛は〳〵きつかん古今ハ竜とのてなを花ハちりりめ
迄梅の?はるふあらハなを家?止を?あくもちよ
大つくの?なかりに永の?なを出しけいのとしめひ?
数?いま?と共?もまつのとき?をを桐所ハ?てと

北ハうへハ折あるき時や咲さくらを梅ちる先桜さへ桜花か
其りる松の葉ては一とせたむくしひとを本ト見え
あり尤もかりん中ハ大れ迄吹見えをたねの忘かたき
石上可きり都のほとりきれ其中て在もりしこそあれ
あかすこる師の鏡の本さ浜いつけしや祕の奥義てまあれ

卅四や やの字の事

やの字ハ能て十四ヶ条あり此外や一やより仕立様有

爲し縦い

口合のや　又やこん　たやこん　日やこん　霊やかの事

呼出しや　伊勢ハ　ある繕や　あてまへ　本阿ちやの事

疑や　花や後に　霊や降らん　あせや到らん　の事

疑拵や　神や迄せや　わなとや　の事

尋ね拵や　内あつちや　人とおつちや　の事

尋のや　是ハ何の中小ありて　尋拵の小間と云

ちりのや　今ハ

哉とたちてまあるくき月をと利一もあや姨捨山

面白川のおふうる毎の治の文をれや霊たらの家をあされ聴

来何の江戸秘とる玄るとしや下ふこ切もて忘れられ（伊勢でつかひて）

おしあれや　いるあれや　是等ハ推ちせ

たらやしるあれや　あるやし　あるやい　あるやし

めやと云は余家のつけ字か

世を照れ日吉のあとを語て流り口の千とをたんさゝめや
志けさゝ浪や志らけ[?]つとし
眠さゝめや 眠へしとし
忘めやおゆしとちおかり旅ひかり林の歌への霧の嵯
忘めや 忘れ起りと云し　めやハ大黒は[?]し
云ゝ也や小家降なる谷水の岩まなかれ下の句を
ミゝしめやハ人の声りと子め[?]し
みちもの定し礼て家忘れハ口声しゝめや人し岩花ハ
味ハ初るましきとそ
随み身ハ絶さゝぬ採麻の世の海浪六十字めや
六十あまれやせんとし

若何なる流もしれの流のうらぶ人に去りて流めや
人みあひし消や世を云めしけるゝと云ふ秋の涙流す
有は分ハ言ゝと切て人手あはそ消めやこて傷しき
こしと云字ハ寧と寄る成僧ん云ふらいと読み共
めやりやりる 杯必ス肴る習しかと寄て[?]し
◇やゝと云 紫のすめやと用し心ましし
花み寄清の秋の深ミとり声ゆる紙をよそふやハ見
まそみなハミじ只家伊の正そとあり
子日す鳴[?]の门の小松原 あ作なま松の跡やハミ
よ松の秋ハあらん 君かみちあり
◇旧し中いと号小家 あれとも休字ハ中ひと云也

花咲ハちりん咲まの前ふの花にして此も〳〵ちりん〳〵と
又咲ハいの字を略して只咲と計云ふに略なり
字法てうつし
雅語俗語を清む語の語ての訳でも只ふ用や要あり
其の句の法の上をさらん極意の其句の句にて云や是を
り申さぬ其字法をたとへ殊ふい天つ定ある事や新れん
仕り申さぬの字い別條もなく候
一△やと云手尓葉是を留りけ手尓葉とい云に
其とはあらぬ事きたいにあつては云留ふ云なるべし
雅俗の語の其言の句もありとをけ俗を留る〳〵ようや
俳諧るやの字有

語や歌さてや名のあれし字ふ外ふ有べし
是ハかな字ふ疑の常のぬし疑のやの字
ふいひきし外と云ふ七種のやうあ
疑の外かと云手尓葉に三種あり疑の外の
只のかなり
あけも五文字之の其をとらむかく呆咲り事あ
一尓もの外
手法の不出の字やの作せとこやふあると花書ふ
感心の外
云ふ翫し又六其の未りも明と
物を庭裏要したり外

月か　花か　天か

かつらか

秋の露や時々にうつろふ色もさまざまにあはれなる月か

見る人の心のままに花とも見え月とも見ゆ

露もきえてと云し

なるか

天つ風に夜の山の雲居の果を見ると云ふなり

体のか

ゆくへある初子の日の程のかみのちの心をあさぎ

なりけれ

桜花春立つ日の青柳の色もあはれなる

右の句なるかな寺院の花是一つの趣也嘉き人の句なるべし

まし

又かすみと云事をりと共に若葉下露

四方の梢も行衛は空しき枝と爲らせし

夕日をさえや庭の末の子か浙しも音の聞の

浅き露おのづから谷を見る言葉もなけれ夫の柳の

是時云ふ物ならし心を付置し

春にしたがひ立つ春も又なりけれ

のみ思し日の空にあはれ春も又と云ひし

云ふ常に有事し

空も月の山のうちにてこころいふなし

つゆをしかと云ゆへし
さすがなれども萬葉よりつゆの名に稲葉をつき秋風や
有明の月もあつしの浦風に浪まにあるとぞいふしつ
ぬゐなしのには大方は古今のしのよみ歌もみしなり
とゆ中にも見え侍りみ月歌のしみ字にかを添
考と云てもあり又有しのえしかと云を秋字事
事も有よく味侍るべし

扨又いつかと云萬葉の事也いと云こもる也
杉の上と云事と云て大嶋鳴らして立たと思ひたの家
思えてはなき人の地とよすがに見え中るあるべし

みなと云よそのつ字を体の字に流す有
いかあれ人さはのゆか侍らは世のうきやの中へ来すれ
あまは萬葉をうつは泳の字に歌されてもえあひなら
いと云てもかは見ゆるも有やの字の中清のまし
体め萬葉の見ゆる
時なる都の紅葉に浪に君みすれの敬ほやすれ
うつし二首をは疑ひまでありしともしのともせ
りけれ

第七 土筆と云 萬葉
白の此ふしをとと云に多く云ゆる有事し
我立のあらはかゆるあらそ 都の春とはりを忘れましと

詠すりたとはよみてはゞらるときまうまうくはいかゞ侍る
一かな書陪ハと方理よしおほ字に書くかゝにかくて
歌ん深て有事し只ことと云ていひぬれ共も有
あたりのそし只お侍らの事のにゐの理ハ明らく秋の男と
云しのた
川と云ハ氏の王り侍りみけて於れ毎をあふ日でて子なを
是ハあそひ子名をみけられと申し
あと卜云ま　云無れ実なし
伊勢のはるも大の皆とはけ家とてこて消すまし称と
きあり子のハら事秋の形気なも喜ありはうこて教と子なを
前よてもうゑん　あと殺てうちぬ男　男の川のさきすかい

一世けた條あし
又あのしと云申　是ハ云棒して実なし
公あるたし母のわまの姓名日中と此上に渡ぬあり
あくと云て　歌ん字もあり
ちりと云し　あるへき　あを様至してこそはれしの所にと有ます

一　仮名を略す事　極て有
ありわふに家まてりて〈しきりてよしとも〉書の分の消ハともに云を誤り出てき
ひとうかに覚へき人も相ほしまれ鎌倉て附きそりて〈卜云〉
家升子かうりてへ二ヶ所の紙上子名　将すあうり
丢すてて〈卜云し〉家名ハまうき立小をみ人書家屋わし無し

衣もうしもねと云ときなとろ川のいと似かるらん　イトナキハ

日野の野もいと似くなる林か寄にあまいこき　イトニナキ

秋の此の玉ならぬ枝ふ鳴るのおしのいとれすこ京もするか

夜立いとやこそんは尾の地てもる枝ふなるの鳴　こゝろんい　こゝろん

秋萩もむはあれは巻乱ねぬれとやよろいかあき　おとはい　加りくし

信濃なるちくまの川のさゝれしも君し世をへいむとひろひ　さて当てい　さて是石し

秋萩を柵かせて鳴鹿のめなは三尾を赤のさやけさ　三すもてい　三すもてし

秋風にあ花ちろめる北宮より清定め衣ゑ出き　朝あ臣に　朝あ臣に

雪兮を家まやとて北宮の方保てもれと三おろ　紀友い　公兮し

浅茅原ひらめくさ是歳の山の尾つ風者帰るく　浅　嬉しこ

浅茅いつ月もけならん梅をちりにゆとらにおそかさん

かへはとれもかくもまりくへて君かいそみかまーしめかな　如何　蔵人

やまみもりすよへの花の乙てはいつなもとかそ尾も手し　人麿　鳴し

香隣のてなおの小萩花と花の三風と情れと是をは　如くし

梅てのはな露を香みまかせい鳴かたとく今宵折まし　こととく　委し

和み色をといろて梅を香まさとしみ自いさゝらそ

蒼のいなふもて入めつ三つ夜の乙れてあるいはしも春　つれてい　てもらとて

山さるこ人もすゝめ桜をいてむ俵え永ゑ上かさし　たてはや　ただくし

哀しき若の人の正章とはすてそ枝くた花の国は　かくしき　鳴しき

秋風かゝきつれた瑳の本るつ者れくの世かるらん　つらきた　さきあにし

今志もと吃かしねとさてかす衣ふかり恋をまれしる　今こも

はせみおと今いえ一とそをやよいくも居る間か　いつ　ゆく

をしのかたる汐留湾に見え人の恋しきまもゑゆかし　さこ
あすも名クに
甲斐ゑのさやもミしつきれは横ほり臥る土の中よ
たかれ
たのかに
名ふし犯てあさみえたつきたれはのかなしさせんとみえん
そよめい
そよきし
難しておと云ふ林の田の稲葉もそよと早人のなき
あきてい
おしろきし
あきのへてはつミふりんと思ひ雲とのをきをいちりしめ
こしをれ
あめしをも
林の気まも又なれ名残のあきれ空の色へて寒てい
ことらい
ちらきふく
なみもさけ庭のむらさとこしを白し花を悔んみもす
おききてい
おきますそこ
なにおもひとぬまそミるせのかなの色れを恋しき地と
もやすさよ
としかは
天すみて錦の紙なし極色の岸世くも又へ旧か
せんろなく
秋のかなや
今の杭いおぬ君よまへすへ神なはけさぬ秋の錦い
秋なに涙ならん恋の七光る気いせんろちらき床体よ者る

かなしへいなく
流れ流れ
秋の細花常くるよりうこかなへてみきれ水と
こなかい
わの泡に
やましかた流れてれり洞河におかいかる水泡しれり
さあたい
さきうそそこ
岩ふきされ思ひのよみもさねて哀をきてんおかい
幕
あもし
忘れけい神もみんてと社殿の方ちつかもの色にも出なぬ
恵しい声くみをふへむらさきのみすの衣色よもあぬ
岩こ根
ゆめくく
云ふ気い麻布の糸をわとあへての人よ云ひすれよゆめ
とゆへ何となく
やめなり
洞河流れ御さみもおお和とたちふみの香やゆみり
よしやさし
あちいあれき
流ていは味岩のゆのゆふ言のよしの川のよしやその中
からめて
てちから
泉のの浪路を寺てわうしてこ夜も似らへき流ちらくに
きよる
きようきい
きよすずし
かることを信しかの名ふしおきい朝よるはを衣ともえ笑
あそい
笑
みるもろとよことあやめくよかめさえなり時とミ色ん

詠の事をすることを学ぶ者露にても見も定めやかならん。然ずみ
天の名と云ふ君も立ゝし雑は恋三月とも云れあはれ中を　あはれ 網代
清道をなき人をやねたくはるの花といひ歌もいねよと云ふ　ねい 森し
いづよしも都し三月をあきてかくあまの川もに出なかて　何かせし
春と立つ一億りし日もの花わかにはや待ちまし　三待も
立田川絹おりひく中にも月時雨の面をたてぬきかせ　おりかく おりかくる
たつ田川松陰の河の川浪は春とふ出つて衣えやさ　ワカも 若葉も
こるめなき恋をうらと言をやまるあて海士の遠たる　うらい 恨し
恋ありと年の春とかも秋ふかみちかれも三つ　かかる 業せ
色も香もはせふたりねおくや吉野しもさとあまの原　おいぬ
玄は丸く立ち先冥云塗とありぬみてまひあいかにた名ぞ　ましは 以前に

世にふるも云でまさいとめ尚てあはれなる物の名を
老たるよ胸こそうれし雑は古風の名ぞを二首は
とめこかし梅雪あつ三年のかまうとよみ斬ふえれよき　とめこし 夜こよひ
ちるとものえうしの山なのやのそとふのこせ其の山風　えると まさし
秋今よは別れの風のまとを見ると山田の引板を假せて見ゆ　じいい 引板し
峰の尾上合の雲は稍みつるいふ時雨て山へかるらん　いふ いふて
きぬきぬ秋の籠は此すにおすそやらん休の名庵　さらめかふ なれあるか
さるともとれみてけりを見れ吉野山路をこへぬ別い　さるともに 恋しあるを
人目うる住み家の中ふ衣まてふあそて色や移るらん　さそうふに あかてふ
来せこりうきを見てふその山鳴のやさしい神とゐる姫　うとらん あるきく
山海の世ふ共も詠み出来しとなる棒も請をさせるはむ

第三の句の第五の卯と云う二字卯と成時みかた
何もけ春の中ると云て四季十五字を知あし

第九　紫をたし浅緑[illegible]中　是一の風し
萌[illegible]の花は[illegible]かくし別より曉中より[illegible]あし
又暮曉とり又[illegible]晴とたゞせり

月并は[illegible]小西[illegible]興しそれ第五一の枝小いあるみと
第五一の秋の中にとたゞせり

[illegible]を浅すき[illegible]雑四[illegible]とたけ[illegible]と云時は
花のかくやあるしとみ時は海老[illegible]とよせてり
一句と云時は四季よせて言[illegible]つもの[illegible]時の[illegible]之

第十[illegible]　[illegible]多く[illegible]　一[illegible]左力と右
空蝉のそかくてもるまにいとさの世に流をとゞむし
声はと云はあててもかゝき世の中よいけよあてて　たゞちゝらん　忠見
あまりは[illegible]そろとすろと云まい若菜[illegible]の[illegible]
あきぬれは縄も[illegible]といかにて流れきとむらんの[illegible]若中　能昭
声[illegible]てと[illegible]よせては[illegible]かし[illegible]の[illegible]まよ[illegible]を
縄[illegible]と[illegible]とあ[illegible]にて不[illegible]雑せり[illegible]に
名の[illegible]事小よせてよめ[illegible]つの[illegible]

第十　入[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]などは[illegible]又[illegible]など
[illegible]

なのこゝろきさの詠むる所は体にして字事とも申云ふ
皆又是非と云ひも皆限るのみ是を限ると云ひを
あり又のことを云ひのみなりも皆

卅十一　促音と体ある中日体字

声ものを言ふも　詠とも　やも　た　まで　を　志
にを　てを　と体かし　又とく云ふ　云ふてを　みえてこ
字こゝのを　おと体とする　今世用様皆余所え
前に
思ひもかけるえるあしつまあはれ梅干梅干もちのみも
年毎に花咲きは咲きと花を　それはあはれも

宮のみな云ふすれは　かしこや　君きこえは　君か
法もなき人と云ひても　哀の　ふくする　能つらの
香を振るほの　稀なる　あはれ知る　哀とは　命の　心なき
花のうけるよ　あはれなくも　心の　本意に　深る　雲や
あけすがに　みても　なき名は　立ぬる　人をわすれぬ
秋の田の　ほかそ　人を　恋てのみ　身をつくしても
あらし吹く　命の　惜しからず　名を　はかなき
霜降る　夜の　更の　御まいまでもさは　世をく　宮人
別ていはんを　雨つる　花や　ある　家に　待て　云ふ
又それは　そらにうけかに　ちる　花を　見る　人や　人の
昔しつ　やつし　云ふまじ　時なる　古を　すこしの　ひてきたらん

誰しもさめておつる音に夜三更かたはらん山の桜と
立とする立ことに悩ん見まくあとやまと於は塩ド
未明人をば爲すの枕風いかに吹かり佛かかれ
石工かりやおのこの右口たど人への庵主とて謡曲
山神の方ねのふの音にうた人の立まへく家立安やも
皆かゝるも書てれ哉と於は字消柳子細　古の桜をも
今はさこゑいなき名のおしいれいせ帯も今も寺れとといたむ
天を見べミすれこほまれめしの袖の出て恐り散り遊
吾しねとする皆さ歌しむもえむのようすたに翌ニ又入つ下
承川にて桶度を鳴かて人分紐めて風い一人小本子寺
林の人山へかやつた出せずい度る欲ちのあるを　こよとも

未だふしぬよそ　ききとれいひぞ今のきうぐた
小篁の号の名高いやとあれと染めの細けの衣の袖も
青柳の糸くりかへし春雨を見てたいてはころびはぎり
如月の卯の時雨も晴やる西本の村ひとつもあらず
世も近くなれしあれは君の鳴る海の声は細からぬ
咲ぬとて今は此の心浮かれたなといひ寺ありぬ菊ぞん
おたえい時いつをとめの根をお茶すの名こそ　いつとなし
立し今へ下にをとえ伴氏の錦の衣とかけれせめ　下にさく
いま七夕情をちか大井川をみれも中なみ女みちあるれ　ちらす返
そことしも紅葉ぬぬいうちきゝる梅の若葉咲き出る　そともと
同体なのるつしのみさとをきり

はこれや春の[illegible]も[illegible]あるし[illegible]

[illegible]と云一[illegible]し中也意とし字の体なり

ふとし　人とし　いはとし　ことし　まとし　云は

國川　異川　あの土[illegible]よみ　極て艶なる也

第十二　をに母子に　にこ母子を

ちはやふる神代もきかす竜田川からくれなゐに水くくるとは

[illegible]の[illegible]ふかや春に来て[illegible]する

春をとと云詞し　是詞の[illegible]やうし

妹子　云　わきもの松原[illegible]塩干の[illegible]

妹をと云詞し

第十三　[illegible]　[illegible]の

はの[illegible]の[illegible]はの[illegible]香[illegible]や[illegible]の杜[illegible]に風[illegible]

そのとの[illegible]　にとのと[illegible]なり

第十四　云を[illegible]　[illegible]の[illegible]

二つの字と合てよめるなるをとひ

何時　泉

みかの原わきて流し[illegible]　[illegible]とそる　云事也

不見　恋

[illegible]の[illegible]云事と云ふ[illegible]

伊賀　云也

秋とふ人やはみきぬきの下さしも手に手にあらそひ

掛留　影談

五十鈴川神代の鏡かけとめて今もくもらぬ秋の夜の月

杵　舂

神まつる卯月にさける卯の花はしろくもきねかしらけける哉

淘　寝

あさかほはぬるや川辺の東やまふ芸を松にいなくにこそ

庄　浮士

世をとふ人のあまた人のあかしたのうきよよそにおもふ

紗　深

春雨のふりそめしよりあをやきの糸のみとりそいろまさりける

香本　隠

花の香の園にやあらし梅の花色こそみえねかくれなし

暎アナタヘ　映コナタヘ

夏の夜の小萩咲しよるらん月の隈そみえける

得　和

今宵も秋にさきしほよりのすゝき風の手をかけかゝり

ほとゝきすまつよのすゝきのすけはとをめにもそれそ

ほとゝきす大井のさとにあそひぬかうちはけに恋まさる哉

曇　浮

或云浮心なきしト

いかにせむのこりをはちつゝきとのくものうへへ

世　在

おもふ流てそ月の川 なもぬるめる池こそ分

根指 寝指

京しくいかまを出て紫の袴すその衣毛よお風 由史

粟 身其 是ハミ丸をとりてたり

消そふかれ思ひしかきてしく永多を丸を[illegible]ぬもまた

反放 鳥青魚

永路のさかし西橋とろもかし 叡しさ宣ハ味よあるぬるも

瓊花 哉寄柳

あのと咲ての枝のこともちや すきぬとのを人の子かるん

四露 讃 薩公龍古堂

守合基俊判 四露 五名哉

蓬や重ね隠小町田露も学人はこそあると

指 居

四さし涼く深てし折もれハ消ゆ又如こ春のむとこもるん

荊 唇

刈てほん宮の柳のこまろれて行歌席見杜のこそかれハ

一ノ 粹

天と雨やかくの使ハれにつても春の卯つかとりてやるん

水 訓 見訓

よそにつこ月ましあと吉野川なるるとおしふて剣が越

家暁 波獣

思ひもあく おきつろ秋のおともれや いとわきてのこ世へと 豊頼

螢。行　匹如母云

夢ふいく春のと有きれいとめんてきもなき別れ

玉　記

君か初あしたの露のおきそいなハ云てきぬた涙や流れん

造　遠

組ほする長梅の枕も流るゝ我哉を何にたくへん

夢　惜

おしと学人やとまると花桜のうちむもてそ私ハきつにき

貝　甲斐

伊勢の海のひろの浜に拾ふ子もなハ何をよりひろふへき

浅きよき人のつの奥の海や汲干のるいよりひろき

たかみ桜二つの紅葉ともに武蔵野つきしなれ

のすへ濃も流てし晩けかりつ別れへし

雨中花　花を霞の中

三輪の山の鴬のうき宿の花芽の書紫に夕月雨の花

前の岩本さし花咲地ちかいぬる夕月雨の花

時なる君子の宿に伝到よき歌意の夕月雨の花

五月雨の花とみへつの耳到来り五月雨のれきれ

老年と将出て有るきれハ多つ花と流り君有

有る哉し

此あつて使はしまへ花ハ其色の木かけ　光流

耳ハ口ハ庭ぞの山の煙ハ絶ぬ乃ぞ此
ふせこにきせ生をうし松のむまもたれ霧の海に
此ち猿のこゝろ巣を忘れや四子の尽苗とる此
文集云琴詩酒友皆抛我雪月花時最憶君此
此ちなみの歌に同しと云り
雪月花のはい雖雪ハことさら猶もおもしろき時なり
雪月花の此の月のとかの字と入て云はいずまめて
雪月花へあさの川原のまこも草すゝきやはの下にちれん
たゞ同し
雪月花へそのゝ絶間を詠て富貴なりける月をそれまで
たゞ同し

竜田姫のうへの此の林風に時雨といふ人の袖に
右此と云へり めでも賀あり
流こなり本の名も花の雨そゝき雪のもちわの梓此
又ノ名云梓しなり
身すまハ 見てと云 松風のる
もにもとの先 うぬ そかよし さを
此ノ名と云此ぶのゝあまつゝある時の詞に
四字ハ子回述し共も書まて来なり庵の流れあり
聞えたし忘れぬの別れて来たる気とみる此
此川にハおまちて彼ハ聞時ま むかしより太かこまつに

まつりハまたきぞおくりむかへ　柿の梢にいかに軒ハかな
鶯ハ梅の花ハ萩を咲けりとも　池の水は鶴に鶯鳴し
入相の鐘の時をきも静にて　嵐まで松の名の私ろへりて
東さし方ハおしゆぬまで　月のかけりぐらとまでハ露を
高霧山のかけりと風也て　ちるとこそ年までの色ひきて
山かくれぞと思へハむかしまで

来てと見えしと　此ふ同

からうハ鷲しにをおかしてを笑杖引ぬ山の伝なれに
年月ハまつ羊ののちしてこれまじくなのまゝに加リ名
物のひとのたふにかけりを寒　東古のふハ月日ゆくし
み来てと云てとおりよ二つの中らか二つ常に云哉

限りまてとおりし　二つまハ我かよつの称かて第りし
陰曇のよおハやりて嵐と両親かて高と云あを
とみをとりく

よしさらハ我よハこし　白馬むの鏡りを　両親にして
四は家へ高と云ぬをとせ　世の事を示須す
おふやてすへし

并本も　高と千葉の子　五言句三ツ言を超ゆる
うくすに川ぬ　みせやり
見えて第りし　又に来りたる　おきへを見るし

小松中と思ハ文のかし[illegible]す身を[illegible]　三十四

世話を乱し直ハ伊勢の海や沖のかもめに波のよるこゝせ
みせるに此ふ於ゐすとふ言を
業のかゝよりあ落かたる
ちるかをも人かしましてゐ
あいつるほは人さゝくこゝろ
さよおもしのやをもてなしこゝろ
神ゐちまくるゝ戸を以しこゝろ
かりもの先へ小尖をそれつこゝろ

絶藝門字アラハ是ニ十ロイ海にし

廿八　たすけ字のこと

きミハ　こ　も　し　ぞ　此六ツ　めの字ハ下へつけて其かなをあて

谷峰と云ハ龍もすつ伊るを流ミとかるし

きとこと書こし　言ちかへし　みちゆかんとかゝて流し

おしなかいちしなくもとゆへて流し

夜を空ミ秋かぜ心鳴きへに萩の下葉も色にはをう

秋の野ホ花にをすゝめん尾花をまねしこ鶴あるちるホ

掠めのちくらのねぶちゝぬへこともつきくこよと鳴れの氣

よそへゑ見とをきて思ひ川も物を云ぬ空を流と走りき

言ひの流を以かきを何ひきを言ひめのうしろよりすとみせを

り坐り毛みのこして公々くきかなの風をもきし

かくらくは錦てらすきえかなる清きれはみえかくるゝ
ひとゝきも夜をかけてもとも云やよそめ人にもこゝろおらん
その色をはほしかれぬのやよゝのほと云はしめさとも

第十九　假名を云ことりなす

其色よのやこむ　是等は艶ありてすかたありける
春の夜をねぬに憎むと云ふるし　大内をやふかきもきゝ
いちろのあきをもみせいはず人の色ともの流しめまし
よそみこそ帰れは大和のむかしたひかいもれを桜におそ
大かたは月をもめでしかれをあのすさみは人の花とすゝめ
のとまりのかくは一つのめでしたに云そ　記ス

咲ますみ風と云そも秋萩のうつりかも人の香の
春芳ねさめの夢にさそまとひ　竹枝も書きし月の光の
隠士芳の書きて
あらあらていとゝ深きさゝれあゆめもあつりし流れけるの
とをしめてみかし
天の河海あまのはしなまやこしらえあまは志よはせる
其のさるも袖のゆきをうすき山風に秋露きゝくし
浜辺の松と秋風吹くにてふうちそそ沖つさゝあと
在かなをとゝるの時分むへのるにほとけゆきて曉天一
寿ゆし上のるのすゑかのるの岸に動つ是はゆかりしず
ゆるし

ゑノ字上の句の末ニ有ハ能つゝけて詞をつゝくと
いふ
より上ノ句の末下ノ句の上の七文字のすゑに有ハよハく
すれ共詞を続て能し
のかしなとの事いやきにて不有て能聞へ留て
事ハ上句ノすゑに書留てたくミふやすくてよし
ミかしとの句のすゑ下の句乃未よりあれハ詞を助け
て能し

第二十　誰か為に

偽有ていかはかり人の言の葉うれしからん凡七字の切ひあり
つかしかる女の浅き請師説事みなからぬかしの句

題て読しか
花にてぬれしや人の言に能は有と書せハ花を又よ
此師の前しりと云ハつと有もかつてよみあるの
けふあ二つ有とよむへし
梅の枝かきぬる鶯春のけしき鳴ともいまハあつて
山里ハ秋をまた悲しきハ森の鳴をたてさせて
夫を説立つやいけにとよしのて衣のすかい春ハあり
宗祇ニハ立にハ雪を定家にて庭をも立ハとしつ
ほとんと何も逆さりありて春の夜ハとのちるのを昔ニ云て
けつてハ帰りの事にし
調筒作家都稔記

第二十三　色去　現在のかし淡ぬのす
只兵ぬこむ事と云ります比格と云ふ也としいへも字の
下よひの字を付るし
青と黄と赤と白と黒と廣と狭と遠と深と浅と色と
色をよそるとてるけを云　色て抔云ふかしいへも五字の
下より上の色をの事し
色々香々行々越々待々聞々見々有々無々経々
色をのしの事
石上のまき抑ときまて見れば者かすしくを咲けるかり
花ちりし庭の木の葉も茂あひて天照日の影そ希なる
古歌の法ゆく是し月はなぬひはときれ御れなるよ

第廿二　早ぬ　不ぬ　又早ても不ても有ぬぬ也
早　足ぬ　さらぬ　消ぬ　絶ぬ　たえぬ　皆ぬ
風吹ぬ　雨ふりぬ　降雪ぬ　かりぬ
不　足ぬ　さらぬ　きえぬ　絶ぬ　たゆぬ　つきぬ
見沢ぬ　雨ふらぬ　降雪ぬ　暮らぬ
早不に非さうぬのる
かくまりちりてもをやいましてぬものあはれも有と云　重く
はちるみさのあひまやはしかぬ月をもめてしけ昔の色
又
流路げりよみちとうの何なおいくよ来さあぬするの路字
第廿三　泪のとめの事　此歌は好んし口伝可受

あなかし　能ふあらしおかしんと云ひこ只有る也　あらんとすらん　あよまけらふと云

あらし　あらしんと云ふ　こそする　かせよすらみと云ふ

おかし　おかしんと云ふ　ゐふもかし　ゐふもろしんと云ふ

おるかし　おてふおもんと云ふ　たひあらい　たひあらいやと云

体かし　体かんし　第かし　第かんし

第かし　第でかまれと云ふし　かんとすらん　かぬすよと云ふ

体かし　体くるかし　体かあらい　体かあるやし

第九　哉よめ　切りし係なし一係也　二係切ハ

あらく切もする三句まて　切りしといひ　口流をゆ所の

添詰あるや　気の字能く考て知べし　其外るこを切字

消息外　うら人の秋の色に見えし枯しの森の下露

二の句まて切るなり

春まても見えけんぬと契りて我ぬる宿の袖のかきね

三の句まて切るなり

言ていれ歌ぞしや　木の間もる　さる月の影

四の句まて切るなり

あふちる宿の花に私傷を鶯鳴し　来のよう路

五の句まて切るなり

せき入る消の川の浮き世は　なりてあのままこそ聞け

時雨の降りし此歌句は第五句まて切りし　此句まて也

五句まて切るも有　此句は第三句めて切例句絶也

又親句の事ハ秀句ありて言を称し親
の事ハあまりに詞とゞけつゞきを取らる故に此なとの
如くよ読けト下ハ句みよの事ゝてを手懐あるもの也
までめづらしき珍説有し 味句ハ何の句までも云切て
無き誹みんをせぬ事と 秀逸も前にならし 此句
の事も第四の句までも切らる事ハ称し 初ノ五文字にて
切字ハあり 先用第二の句まで切字ある定し 或ハ第三
の句まで切たる事ハあひ連丁寧和らし 位と何にても
句までも読みたれよけれハ不苦 一偏に不限 又事に
二句の大全体あり 下句ありても詞ならぬ 詞慥なる
下句慥ゝあらぬ故 此二段し二段ハ 去何と云事ハよき也

趣のうれ 又口調先に留めて慥なる我にて一詞
慥にて口幽半ならハ 詞留めにて口の慥なれ
懸らずう詞口ともに留めなるも手尓の一切読
深あと中趣し 口詞慥なれ 花右に不及 口詞も慥
までも能案したる物にと云ふ 社なきに云へ
傍れ口句の留めハ幽なるハ 青過去の一節読む
なれと云人までも知らず位つし 云ハ其者の形有
取り座く余つる事へ 此事 好節中の事 定き
と云ふにつけぬ風情をいふよくつけかしなれ
是よしとはいへれ此句の切字を余つ百句を付
趣し

一とかく御かは云ハ出来ぬやうにと伺と候て又
作るへし
旅路も名所人のあまた世ハ侍るめり事ハたちまちに
とかく事の卑し
川ハ川流を始さめもたかあとかく水辺のあやしき
又おて旅行しかる山花の名所にありぬ是ら何ある
月の事も見えもなき只ある　数とも書ぬ新古作

第廿五　旅ハ五句まて續る歌し
主則名所の山の岩かけ高き処とき事ハ今の世まて
此方作りて達せしも今帰去と云哢句ある
歌

面ならし
梅を見れとみれ冬きのまま今見るまへも敷ハ
此方面ならぬ家の寒えし皆哢句を入るは
是と續きするとし

第廿六　冬の出家の事
天かしハ入るも旅二句めつ五句まて又四句も
名残く習ひとるへし

第廿七　伺の仲を先んと見きかの事
のと云家と見る事を好事の中惣し一の伺ハ見る

たれの趣のめでたし古人の云不易ならんとすれば甚だ
難しく流あれは又あしく流よきは不易ならんとす
云つり是を云ふ不易流行とて不二と云ふ云
則此ニ付るる花実をわけていふ実とは不易花とは
聞く古人の働作も不易なりとも不易実の事とそや
趣し今の人の流行も不易の功成ることに正しかんとは
有実の事あそ中ゆかんと有花は流行て先哲の
書を探る百年を目的とし事は詞を求て不易を作
歌さえ不易ならぬ物凋を落り来つし流行の功也

第十八 事を後に一概に当つれ

下句は韻を好むも有一向韻なく能も有云如し

要なきも有云如して好きも有冨てよりかくと定め難し
先縁の字を取すれば冨るよしされと冨て定る字
かこし流行をとえてよしあしを論ずるに縁の字
付くに有ても好むも多く付を趣し

第十九 後の五かしの事

いかなせむの如、云文字の云三句は見ないきせんとも有べし
并一の句ある有趣なく此すかしは纔かとなると云はでは
云おもしろ詞也 此句不置ては不可 掛合 但まいしと
流行なかし
いかなせんむの八治不定は忠の趣りと見ゆまく

此哥は五句ある間に一所宛八所を読籠たり
釈ちをまうえんと共とも字の八所を名をいへ
五言の句なれば此哥は意言と云句此詞一字も
て読詞し
いふ世しよりて読せは其尽されざる詞尽き
是も此に動ける詞も一のみを云は借ふ之詞
て詞の尽るにさらあらくいふ例ふ歴ある言新
いふせんを読へし

第三十　哥のなり歌と云は古の事の事をかきしは
云心にをおとせう万葉のまつりことう曲を読を
て哥のかうと書てあし　継二人の哥の田のくと
昔人の作を読るのめし　作昔人の昔の哥かしと
摘摩る昔人の作と云読せ　昔の作と昔ふ歌と云
を詞の意の何の書てあし　其時代を乗かさうれ
古の事に読る哥也

第三十一　此哥の歌は哥人の昔は定する所し
此歌は昔のて読いされ　あんする事も其時のに流きする
古めし　あら哥読んとて哥詞にて採で哥意をかくせ
と読いみにみに　其哥歌にあれ　其詞となき歌に
也哥歌の歌にあるし

八十二 猶くみやしくはたてならめきらにならと
なりし 像成
事あるくをはと定ふ秋山の蒼きなにれむし子
是等をねとれしおと衣ある様し

第三十二 身の上を人と談す
常じ主人の事よまつりまて家分る他の事り無
わきまへてもおほえ人につりける もたとへれを聞てよし
是は他人に云事ならをいふきし 只はりあつてあれ
よい事つきはちもせんいつふことはゆるし
可能るし

情つき者とは人にはせて己たのめるやかんとすれ
是に三人と云事をふと侍るべし

第三十三 下の身分上の身へくして言葉の
己器あるふたてかへ器も第二句へ器も第三句へかる
かな又の事も器も能く寄知し
云 神の歌とて
ありすも河辺へ入川もの中の人の上の花深の他
下の句上句へ
是りやあめのひしを中小川むすびのりはのみ人の家の役
きりまあふつ、ひやとり[illegible]み[illegible]の山[illegible]た

さよふけし篠田の森のほとゝきす跡なく成て秋そきにけり

将川　涼

将鯛舟ゑとる武士のいさ川の夕やきの空

かつくゝ涼しくも有か菜の衣見し冬寺の雨の名残

いつ平元かきてめくる七夕の妻まつ夜の天の川風

絶てやいさい有をいくせし荷の葉の秋の夕暮

日暮の声はた来てうかれ音もつきせぬ花しき見る

閏九月重の日を

さて夜のをしきにさえて情ある秋へ行は秋の限を

冬の月

詠めつきぬ神に見つらん山家に寄る風の音

かくしても咲ぬ花も見ぬる山路の菊の香の

山家にて日を

深く尋ね里の細谷の明るに山の陰にて名残の風

つきぬ月の夕みちは今様と小ちそ見るさをちる

萩の葉に露有てや秋風の吹しきむるつまとなるらん

忘れも鹿はの秋の松葉の音おと雨に伝ふ風には見ると

竹簾の戸に月見えて思ひにきて結ぶるの秋のあはれと

わ声の袖にうつるや有明に秋風吹いたつぬわたしや

つれあはれ日に恋しあをと梅のかほに浪路よりも白ひまめらん

梅ちるは風も吹てや吹つらん冬かなる今の袖にそてん

右十月廿日上旬へ贈して後日まで

第三十八　　幽玄体一

新古今 春下

おしなへて青葉の木間梢ゆへたれかはとらん春のなこり

第三十九　　有心体

津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり

千五百番歌合

有明のつれなく見えし月はいてぬ山ほとゝきす待夜なからに

後京極摂政家御歌

和歌式 手尓於葉抄 終

一銭〇〇〇一

内訳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第一 をはの條 第二 ての字ノ事 第三 重ノ事 第四 かな字ノ事
第五 かの字ノ事 第六 りハノ事 第七 哉ノ事 第八 能を留ノ事
第九 能を体留ノ事 第十 同じ手爾遠アマタ有ノ事 第十一 日字アルノ事 第十二 哉ノ事
第十三 嘆の字ノ事 第十四 そノ事 第十五 らノ事 第十六 体字ノ事
第十七 ての事 第十八 なる字ノ事 第十九 入魂手爾遠ノ事 第二十 抱キ引テ読 さこと同ノ事
第二十一 手爾遠留 ウタヒ留

附録

十一條の傳ノ事

春樹顕秘抄 出仁葉大事

蔵書

凡和歌ハ詞をもていひあらはす心の作何の上作る事なれハ手尓
葉を肝要とせり されハいかりたく詞作よしといへとも心の手尓
をは違ひといへるもとよりに是を拙歌なる也しておもふ
とハ出葉と書たり草木の葉なとハ何の草何の木といふ
ことを知らる也 葉にて出れをしらしむるものなるか
これ和訓のてにをは葉をもて之義に理をしれなり

第一 をゝてにをはの事

かハ そを なん なむ やは けれ

いつれ いかなる いって だれ いとゝ

やらむとらんてらんとハ是等の詞にしてハもを以て迄

待ぬよそたくへも詠よ
おもひの淀川つゞの高瀬ハさすてよりしの庵かゝらん
夜ふかく山おろしふきて寒き夜を君まちかねハひとりねらん
むしろりたくをぬ川の末なれハもとむる代 何歌くらん
あちきなくつゆおもしの声もすしおもく久しきに待ちつひらん
むら萩くろの花ハなしとあふくしき露しも黄の嘆よさらん
もしつゝなゝハ人を歌きて露まつり有月のうつしておもひ出らん
いつぞやん身代津舟のあいかゝおみ流れのと渡りや月いゝおもらん
西代指て山に入ひと山までをすがら代明ハいりもゆくらん
後藤山ら代西代なをすり指ていつれおもしりもりの月おもらん
おとゆる秋の荒小路し東武前道の露乃あ有さまをおもん

武蔵野ハ林ともを秋のてもおもひいかなる風の吹らん
秋草のおもひゆく末をちねましいひてハ露のきえ野に出らん
さらなきくれ雨そ空のうれ中にいりひはし月を仰ん
ともしびの光の蛍の涼しさにちりてこゝろも舞をみん
くものこゝろ内白の内のうつりとを流めてをおもねへし かへすかすや
わかれ川せやおもしいつもやまし八別の事之

治定しおもむる事

云りん ふりん 引ん せん むん るん
此類ひあり
おさへつめておかる事 是代らへの仮名をいろ
そをよハて 言ふ 也

八心得あり是等のかはりて有る處し出る人ハ秘ス
喜撰山◯の本哥と見る也八在る有りて秘八也らん
後撰し入歌の原は皆不其意之れ在の事を得て帰らん
今ハとて鶯さへや春の音を聞ハ坂山の老川歌らん
のつらぬる事　うさかひの事　女詠うさかひの事
おもゐてかしらかひかしらかしらかしらかしらかしら
ち◯字是ハそのし一の風の事作り
らし　あね　ぬん　ぬし　御し　通稀
と云万葉右五ヶ條以外出ともらぬかつて同
るべし　かくの如秘を思しらん有り法にて
ねさて口伝作り秘よ
谷のかけの木末の事河わ秘本ハ其の秘らん
此歌の一字をねて云歌の草らしあと云事之　私云文意ニテクメカウ
第二　初しい事　此外よ字きこの有りあり
五音第三の音ふてとさつり
うく　ろつ　ぬ　か　む　ゆ　ゐ　う
波そ神よむハ歌に　きぬつとこそ別　としそこね
わそおもよ　人をそなむ
ぬ此哥りてのつくを得あてと云處し上件の歌ふ
しき　を　弓よ　しか
うへのつくしと思つて君那り
在家見と哥事よ首の的ハくもりて人ハ出しさ

我のよはつらぬ身の君なれハさそとありしに御　松代
於そろし　月をそろしき　松をそ友とおもひしら
君をそ知らん　私云サヽヘト云ハ言葉ノ下ノ字ヲ云　カヽヘト云ハ言葉ノ上ニアリ
と有り此歌ハ何ぬその字なる是を下知のてにと云なり
我をとふ　尚をさし　なをさりけ　一人なりとなりて
問ふなれて　是等ハ之　点ノ分下知ノツ
私云　是清濁ノカハリト心得ヘシ
そこやとのへ行しなかりなし作りたる歌も彼は
むかしの歌をも引て取る由は以下猶草のつるやこそなれ
是ハそとのてにをやし此故にとありてよひしきなり
又やをけれハとするへし　作き味とよみかし

是ハ其にけて子日の松ハ今年をなりて一陣松ハかそへん
そとのしかしハ作る事余案是なり何若之
きのふまて昔とりしハ前の字を稲葉を絶え林風ん
折つ也ハ袖にを包へ　松蔭もおりやまやらにかんの歌
風のなく　風そよく　常のなく　常そよく
以何也もかしハ作りのと云時ハその内よろこひの
てにをはしるへしらかれハそとする處し
其事ても菊も白ね出るハ物とする第一そ有
山なとく人ハ知らし山の名なりて月のさ行て影そてらす
是等のあるハ大切なり是ハ深意ありして
常のこと　ひのよしとよむ事　余案の事常よりハ是ハ

古今にて今はしおかよふ秋山の花をかしく見き川ありて
松路のすゑに舟橋のわたりてのちおもひやる代々人の事紀
是等八代々の上ゐつてる故ニその事ありあら思し
されとて　まて　てそ
是等の心得あるへきうや
さて云のこたへてかくあり　此事の　よ
此三の個名かなひ侍り
さて　とつ　心よ
君かおほろそ　君かお源の　君かめし源よ
皆あり
いひ捨てあり下知つ八かくし
御秘しぬ源の御なるわやとくいて後に得て毛のかくる
さましてをさへのいろ八てまて置るへし
身のかきり今それしらし八かつしかして
の語あるへし　以上を口傳かなし
第三おもて云事
凡ことを云とあり五音第三の帝にて言へ思し
思けせてね　へめ　口　せへ
是ならしとまう那ひ
かつしそむまく　人をそてまて　あらしくてきか
いはゆるをかせ　いおそねせね　かくしてそつんか
ほせそしてそつん也

如此五音のうちのつゝとおもひとありけり作る事也

上件の外に

らし　こそ　を　よ　はまし　まし　か

并蕨何作てしるゝ詩は其人ゝ語れするの

霰ふるを立る所に鹿山辺をまでハいづれともん

月をそ見よ　恨みんとて花しか露をも恨みんつゝまゝ

といのまへにおりて詠よ

夜の色秋の夢まを恨みある紙文を書ふんで紙のまゝに松

そこと云ふをこゝにしも云ふをとゞめて止かぬ如事作る是又

わかが大事あり常の人ハ秋よ

ちの浅茅でて擬ば何ぞよ君が衣まその字に流ありける

如此のその時に擬ばの津の字よあしおりてかゝとも此

ありうひ作りいつまでも口伝をとも　私云休字アシライ也

おほしく云同じ必までもかつり那也ゝ人ハ

夜の彩たる引写る折こゝそかゝる山ゝハかひをあり候也

いはや又月日の影を知らぬ身ハ岩の苔をも侘つゝそハん也

此名あり

エケセテ子ヘメエレエ　此外　ニシキカにても留る也

いろ香をハぶひを入ず物絵詠○かぬあまよ松つゝそ見る

桜花折あへしてを加りはせぬ枝をそ言し　歳候

其口やの字の事

凡此や一字にあるてや世ゝにて口あひある

宮や北　月や蔵の名くハ衆り
ひいなや
かりしをや　小袖瀬やのおひ那て
らうふや
蔵やさらん　畜やとらんのおひなり
うらひて　様らや
神めしやとや　物おゆつとやのおひなり
様ひ上の作るや
ま術あくらや　又とうくさや
様ひのや是ハ今の中上おくへし様ひ様る尓ほし
はるや名くも被よ

かほりあるさる内の鳴の人あれや敢くその御ひてハ及ぶ
名川の上ハ北まで敢るまやゆまうりして集らるらん
みちしるまつや　いろおれや　回しくかしちろうるやの
宗なり　私云道しるき暇あるなり
うまやハあらやなり　あまやハあらやなり
めやとふ水の葉の被
あふてらん日まれ語をなまてたり心のやうとちる敢さらぬ
あら申さらぬやるる聞へしうとさらぬやうらむへしとこ
いつほうる男ハ世候の様あ所のせの満波卒し出へぬや
とせ出へぬや二爰し二へまいり東の声まる心ことまつり
是をかしうるかひたるなり

芦川たつ田なとてふの淵のふちに人よおほゐきへかや
是ハはしよ留るなまてるとて六十二への中やかへやとむあり
おはしき人かやきゆてあしへ流るしかしうたへなる之
やはしよりに留の事
花よ今渚の春はなかゝり詠める歌に桜まやハかなん
子日する野辺の内の小松原千代をハ松の枝にやハかん
是ハゆやとはしつまへなり詠める歌ハ松にやハかん
唯ノ歌有のうへにあり千代ハ君その枝にやハかん
君かうへとあり
はしやはと云て中留よ其紙や哉字にしめ
やはと云はをあり
鶯やハちゝむ春よのおもしろの花紫やちらん清さ
又やハもの字ゆ思して留やとてもりいつるに留あり
秋の田のかりの手ゆてハ稲妻のひかりの間をもなやあらそひ
やかしの下へもの字を入てみるへし
切やよ関路ゆたゝる夜に天川かすむ春やらん
右に日此歌別に習あり 私云波ニテコソアレト旅着スル出留之
とやと云はに留いはゝ紙に留ていつる
河にハおなゆしきよ流通なりて見るをハ若よひなかん人とも
難波よこしの芦のかしの間をあやしけ紙ゆてかとや
よう波の立つさゝ○たる藤衣をけしや人のいとゝん
詠めるやの字あり

立や彩かやあと立　さや夕日　うつやまあと
のおもひあり是ハ歌よ目後おろ抱し
第五ヶの字の事
凡うらひのヶ常のうしうらひのやの字ハはし
哉と云こしりうといつゝ人の字ハ業あり角人も
古歌の人おうかかおとヶかこ悲よろしき、ゆゝ人よ手やん
夕月夜さうやさや居の芝の戸よさびしくとおるゝ日ぐらしの声
あれうらり気おりヶおもて出寄を動くとめぐる春の柳ヶ
前の歌ハ心得ヶ人思ふおもえるしいよ後の歌ハ
さびしくとおもへ那也
さうと云ぶな落葉の事

さかきとの山よりもみちまてにゆふとも旅ねしてかゝ
立田の月をおもふしきり浦風よ浪もうつりて見つゝ衣にしら
甲斐のね代さやかにもとふかなからおこぬりにやる小夜の中山（画ノヤウナド云心ナリ）
此等のしヶ八大にこ返去のしのてにをはありし代と云人ハ多（此カ文字頭ノカナリ）
葉ふふとかなひ侍り
返去のしれ字よかな体あてしかといふ事もあり
又おりしヶ見しうといふ代称みよ古歌よ見る事も
おりよくしおもふはひ侍りつまよ那也
第六ヶハと云てにをはの事
是ハやしと云よ多業よかなひ侍り
作ふのことも代おもハぬ時してなど云てや春の藤の陰ヶハ

あしかきし色紙の人の神代かんなにて月にかゝるあまた
かくしと云ハ万葉ことこその字かな体にてよむなり
争くへハ読よ
いろはん思ひの中よ書ニハ色のうつろふ世へゆきたん
あさひまてる日ハ神の心かハくけさふきよゝ名をいへん
かと云てかハよ見る事をかやの字の用このことし
体なるに万葉ニ見る也
郭公の鳴のあしたハ鳴音ハ君ときゝん鳴やらん
菊七しなと云ハ万葉の事
化白の読りよむなと云ハあはれいひ読んてある十し
むらさきつゆの雨のふるはハ非の情といひて以事也
読よりこ道とハかなしゆへにきのみかゝハあはれハさかりし
飛鳥のあけくれかはハ宮古のかしこいひ通るましく
是もしなとをもとよしるへ安なり
此外に読とをさくて大をいはるゝと思ふし争をと
いひし云読んてことあり
物あらしのおもひこの家にもよのみ兄ハ好秋乃桂かな
かくるを
りくる八十氏人のおもひつかかりてそなかむあらひてふ万葉
是ハあらひてふ万葉けてなかむといへるなる那り
物をと云こと是ハ必読んハ万葉之
白玉か何そと人のとひし時露とこたへて消なましものを

ろ　せ

ちかひ子かいはふ社のこと葉を法連せハ秋にても春秋
笹すゝきと見しゆんかゝれ歌体しちはるかなる秋の外のくるしきハ
かやうに云てはよろしき事
歌よりてわかるへきかゝれ歌を入て句ひの秋をとむる

第八 作を異にする事

花立ハ菊とやうやん白菊のうつり枝にうつる香のかく
富すてとしの暮なれはこそは霞とみゆる松も見ゆる一句九
菊是ハ年中さくる絶し
ゆきに葉をたをしまき掛りてたる是一の外の作り
五月の涼しさやうに見えし別より暁えたりの紀ゆハよし
あれゆる暁たんかな暁をたくぬり
月のまへ八ちかくわたせてえしえれ紀の月のわたりの秋の夕へのね
いし分花川の秋のやうきにたゝめり

第九 仮名を体にする事

ミヽセ 今ハしも かさと 花道をかさと やそハし
みちしるへハの誓ひあり
にを てをとし やすむる那やと
又 見えく たちて見ん かて見ん かゝえ
かゝるとき 玉の体めてつし 冬の夜ハ月様あり
餘ハ准之

第十 はしに紫代一首の内にあまる事 無し八
大宮の松の千とせハなりゆくと人わて紫かゝりつゝに

是ハちらしに紫しにあらしられ
この字代用ゆ心の紫に紫しいふ事是も一首まてあしとも
秋の夜ハ月のひかりも山の端をあかしと晴く雲もまかれ
やの字をあかしむ所ゆ心の加ふるハ中にもまかれ
ハ心のことをあかしむあり
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつハもとの身にして
是ハ隔句ありてハおもしろかるへし
うつせみや夜半の葉の露やたまてかよひなたくひなかれん
是等の句くハいふを除くへし此味をしるへし
問答の詞一首の内に隔句ありても多しられ
又月並一揆の書付ハ取しの人の神の法度
まつ一首四十の浦波是ハあまつともを表に此
第十一日字ある事
日くるかはとかく字ハ多しと申人もよしとせん
なかくに神より前やなかひらん秋風吹たる魚のことも
是はとかく作り田伝へられ上古にハはしかと
はし詞はし字なりといふと諸伝まてと
歌くみ能々心得ハ難く思ひ不堪にしてハ中
なかなかしるつくや化かやすの事といふを伝り
つくすまて成趣し日字今ハ嫌ふなり
第十二紫と云ハ紫の事
紫ハひの外

あやめ草こひぢの底の声ごとりあまりしのたねのためにとは

竹の葉の事

東路の不破の関屋の跡もなし絶えむまゝや立かへる花ふるなる

かへしなる

君か代にあふさか山の岩しみつこかくれたりとおもひけるかな

おほかたましきものとしらるなり

肝心の事　又中の事とぞ

日本まてハちか歌なれと外事家のしるしにて思ふ月日哉

かしこきよまて涙のうちにまこと月かけを惜まるなりて

ふきおろしの事

桜さく遠山鳥のしたり尾のなかなかしひもあかぬ色哉

第十二 [illegible]

三嶋江の入江のまこも乱れ芦の末葉をこゆる五月雨の頃

山河の岩ねもとけは明蛙いはねは五月雨のころ

五月雨の頃ハ申す事耳なれて五月雨の声

増鏡にしるしいて侍る事なれハおもひ頃

いつもの是非なしと侍るへし

古へハ唯彩むすひの山の端におのつよりて月出る頃

家せこもりなむむしおほへし梅花をなれてもの宮室する頃

郭公のさゝれにとまり下まて卯花の五月まつ頃

文集詩

琴詩酒友皆抛我　雪月花時最憶君

此時といふ字ハとありよはしいつも口傳をうくへし
おのへより木のまをもるの南てらき雲の立わの三河かあるハ
第五句をいひ残したる是ハ口傳をせんと也
第十四ニてとゝ云ハ二紫の事
モ いふくて同事しく人をむかしまてそれより庭の緒ハかり二葉
ニ わらのいはのこの別の中をかへて猶とらし秋の
ハ 紙漆しるかまて泊ハ静にてむかしかへて大和ての紫
ヲ をよつるよりの紅色ちらして柳の枝よ雪おほハ分し
ハ 山さとハ姉への武萩を照して雪のまつ河ら分へし
ノ 八おひてけのひしきの三河ら二て
セヘ 嵐さへ芸の中よへのうかんよて
してと云ておきも萩ハ二ても日しきるり
ヲ いかにも埋り月を女として秋の倍ね山の紅葉に
ハ 筆の月ハきより山のつもりして見別し古のあきそかろる
ノ 伊のひかるるかつてみる都の山ハ月おもくしゆ
第十五君かしと云てよその事
五音第三の音を申可留
うくすつぬふむゆるう
二申をさくてみゆしゆむるあり
箱根路を我越來れハ伊豆の海や沖の小島よ波のよる見ゆ
此外ニ證歌数可勘 ニかゝしるをとりてとむへきなり
第十六体字の事

一 清の文字をいふ事

郭公鳴や入日のころしらまとひかりしめ也ハおかしく○清
ひかり給ふれハといふていやしく聞ゆ也ハ粕しめ也ハと
体めつるあり

我とし　人とし　いひとし　見さし　聞とし
かやうのしもしきハあてやはらしくなあり

了淋　國淋　おきり　是等之
きハあてやはらしく聞ゆるもし七つあり

しもよ の や こ む　是ここのとよむへきあり

忠岑　忠見ハ共にしかし代末よを紀清也ハ
よハそれしやはらくといふ事

裏の夜をねはにあまらいとひ出し人ハ松をや赤ハらん
御かかきをるハそしいてあり人のつもめて嫉しつ無し
棟梁ハもの字句の下てをきりま也ハ必清めて
羽ひつくといふ事

郭公鳴や五月のあやめ草もとひかりしね也ハおかしく○清と
康秀ハよの字を句の下に置清也ハ必よハそれと
詞を清まてやはらしく聞ゆるさ

春日野の飛火の野守いてゝ見よ今いくかありて若菜摘てむ
其十七清しの事文字以上七ツあり

調　筒　名　宛　都　拾　禿
かくのいるつあ事まよりて文字加へる也

田子の浦にうち出てみれは白妙のふしの高ねに雪ハ降つゝ
此うたの心ハやゝ人の見しれん歌とこそ世ハ覚さる御哥
ゆ川まてと口傳を加ふへし
第十八 たましゐ字の事
きえも 又云 とむし 以上六日
若かつ縁とはいへともうとききこそ偲ひねて若かつこそ
かゆるこきしみゆるハ日しひゝきこ
いてし日かハ 出し日かせ はてもと日暮之
みちぬるし うらみんと人をすむなり
此此ハあきはに浪たつ田山秋はるや君かひとりこゆらん
第十九 入魂衣紅葉の事

たつ きえ たま いろ
ひとよゆくの関やの板ひさし あれにし後ハ唯秋の風
此のあたりハ蓑かはハ古跡なれハ物しき跡ありゝの事
見るめハしをいりぬる跡の蓑もなく神さへ浪の下よりぬる
蓑跡ハ今ハたまあてゝいせの蜑の舟なかしよするのち残れ
見る人しあまのとるし数なてあるいけしへをさかひなれん
異路古人非恋しき八橋といふ處に川る杜若の事
かやくの床の羽衣送の衛なる不絶し味ひ知處し
第二十 か川之へなくして日もまし住吉の事
つねなきことはを知し まといふ時ハ嵐の子へあり
あるし云時ハ有る海豹あるよふ世はり

ひさふるしいふ時ハ甲よ添きていへと
ほうのまゝハ時の習なり 笠 草 太刀なとを
かへあるへし 加ふ文にハ幸苦之多く協よ
よそへしおりこそすりをもものたくひよよそへて
よむへきなり

五月蠅の歌ハかくしても忍ふ思ひいへてけふよ添をとよむ
忠見歌よ
協いてかくしとゝまと中よいりよあてつるたらんなるらん
あてつるハ協君なり
ニほうへを添てよめてハし添ることゝ云なり

右大将家の歌合よ馬駒を縄たけとよめり
しかれとも紅葉よして召るきよし難せり
古歌よ此の五つよよ歩てよめり
引よせて思ふよよりて馬駒の添を引出てなハたけとすへく
其詞をおろよいふよハ芦 荻 蘆 笹
なとのたくひよるへし

第廿一 千年松葉不易事
それよかすみよ ふるかたよみ
千早振神代もきかす龍田川からくれなゐに水くゝるとハ
此の歌のこゝろハ落葉やおしのの葉を風にそゝるなり
是ことをよみよみかくることをいふへし

はなかゆうと　とをかゆうたの事

かしのしかるうて　ゑくのしかるうる事

いひくを以ず萬葉ニ在ニ二月の事争ふへて

三日の京ハきうてあうて和泉川州をきうてう出しうらん

君まうり歌男をうつ仏まな道の見ルハ出しと加をハましやハ

ししうまえやハ少きの門しまさうしと云しる女ゆうあかいは

今ヵてか申うの歌いかなとよむへし流えて分別可有

のとゐり地事

吹まより册凡を定て秋萩秋のうり川虫とゆう人のまゆの

ひしかれ衣祓衣の衣を過ぎりん行衆とふる月の光の

あかまでいうと浅くとうえゆうふかあ人ぞよふえあう見侍るもの

より菊虫の事

浪ま立む神人ゑてあまひきたままの松山たかれゑんしより

立の浦石枕の下の歌こる尾上の鹿のヽ志ゆのしより

てふをえ代流中尽る大事

来ぬ人をまれ不の浦の夕る夕へ駕くやと焼の男とこれ流

やく駕としれのやまうて入ると決あり

歌ニ

そ京あを道おそひきやとハたりやん是と大川のとゐり成候

水の上を照る月ゐる代かをある八二ろしを秋の宮中成候

枝よかをとおうて蘇口の是ゐ道ハ萩てもみの流としてゐる

おもひきやしちのはしかきつめて百夜もおなしまろねせんとハ
萩さえて嵐の床の苔かてかりそめのやとハ[illegible]かりにも
三月のやミのくらきにそのみち(?)雲の上にも月や見るらん

道一冊大蔵卿二位法印玄旨よりの傳を陪照
稱し申すゆへ間此葉猶相傳申候一子
ならて御進るしあるまじく候假令陪千金
哥道無執心之輩不可許之可秘々々

元和壬戌年八月十三日　亜槐烏丸光廣

右條々者此道之階梯深秘之大事於哥道
末代之明鏡也假令雖運千金志少輩者不
可相傳之若背此旨和哥三神并聖廟之可
蒙御罰也仍如件

相傳代々之奥書如斯
同宝永己丑年青和吉辰

享保十四己酉年六月良辰

風觀軒長雅

八数安長伯
託心安正雅
託心安兼雅
菱井文親
田中宗昌
僧　通性

私曰

歌ハもとよりしひ詞なくてハかなハぬもの故、さるへくもあるよしなく
にも有てにをはなくてハさまれさるのなくおもハれ一字
のてにをは欲のつとたゆむありてにをは大切のことなり
て読焉し僅に焉哉乎也の助字といふを
漢文のてにをはなり是ハ一字ちかひても文を読まれ
又漢文をよみくたす細不可助語なく然
なしよ助語ありての助語のつけ能合點ある事ハ
にはの侘ハ自然にてにをはなり人しらすしてもにはなし
かの字につかふし入不可助字を知るにいるま
しまらはもしハにひをかしくあるしひとゆへ

拵くはかり侍らハ歌はいやしく成なり覚えなしとこそ
思ひて不堪の人のつくりこし説ハいといやしき説なり 蒐
好侍也し筆も紫式部かとむましか覚しく書たる
所有しハ然の習ひと云ハ非之是を当流の手爾波
なり 凝の爾にてハあらしに氏者々の詞なり お尓を云也
とし 和歌の手尓波をもはらしきものハ流したる哉なり
侍ると云ハ漢文の助語を釈して見るハ而と云字
よおもて而の字中へ入て上のことは下の事をつゝく
かるといふなる字なり 仍則有ことはハつゝくる 学而
時習是にて知へし 然るを方語の違ひにて而の
字代章の助り尓かへてハ文をなす 覚ひとなし侍し
書くを見て侍ると下に当ることを代おしく書尓
ぬれとて侍りし而と云字をしるけて侍るにし物之漢字
尓の中書ハ

秋の田のかりほの庵のとまをあらみわか衣手ハ露にぬれて
といふ義なり 歌き侍ひとりぬる夜を上までつゝけて漢文の
通り歌てしるをひとりぬるといふ詞をつけき侍ひとりぬる
夜と読なり 是御日本書紀尓ハ撫而哭日本書尓て
侍ると書たるハ是らは皆神代巻大蛇の章尓有り
然也ハ侍ると云ハ而と云字代なり仍尓用て見るへし
しられたと侍るも十一種の流しといふことなり 是ハ尓
尓準侍るをおしておかしと見習ふなり 定種々の

作ん詠じし競歩人の哥に秘して作れる跡に
深する二ヶ所
あり候　ならしは帽子返しあそし　頼はなし候
清く候　難く候　いつまでも消えず称し候
嵐返り候　四方揃候　てらてら候　包む候
右返り候　尖り返り候

堀川院百首

我か子ゆへ子をかへし鶴鳴あり草の上ぞ候
是をあり候もいふ武者小路実陰卿御門人源仁小野一集
詠りし平野社諸詠んとて秋在川へかりし作のこゝろ
下総に甲いひし妙あへこゝろも妙へ化ての門人流是ハ
いかにいへる有し的實語口
世に伝ふる所をもってあやまりとみ候秋の作の字はし
てんすらし秋のかむ自然に候いふあるく候の神あり

新後拾遺

風ふけば尾上の桜散りぬらし積れる稲を雪と見え候
此中いくらいふ詞に返り候之物てある之の習い定まりて
候すなはち作として六の字の口にて桜の散りぬらして
門ハ高の散りみえいふ文の字に吟元候をつえてあ
文のあり是を詠みす候といふ秋のまでの口とを積之

続後撰集　後嵯峨院御製

淵のこほりや関路の板びさしあけ月のゆきさへあらし候

是ハたゝし詞の上ニ程なく云義理哭なりてこそその
子細をしらさる人ハかやうの詞歌のことならはしとはあら
前の事も見へはハ皆ここにさる故ニ毎度てをはまね
ひありとそ

續古今集

春風の吹なる程ハ櫻花梢のかつをも春まつらしは
是ハはらむはしと云歌の秋ニかゝる迄はらむなり
本末のかゝを春ヒ包と云下略詞之然ハ而の義ハ不紀
かといつてはらそして云意有とそ

伏見院御製

櫻花咲なや川こえよ秋よりの山ハ霧こそは
是をはらはらしと云霧まこそ治りつてこと詞なり
一邊ニ何ゝ包むはゝのやうまことゆる之霧ハ根引ちの故
ゆらゝこそ讀なり

續千載集

あはとり霧る夜ハ春なるゝ山風にゝ雲そかりは
是を疑ふはらしと云完果春なるをと云心をかゝると疑ひ
下まかりはしと尖津ならはハはけはそれとこゝさ
なかて下の句を割らる和疑ひの津と云学三句ニ春
なりまされハ共はハなりはらを成なりなかの不
思卿はらしぬきよし
君かたなお春の共まをまし若葉つむ我もゆき宮ハ何はら

是をもつて詞とし心とは心ハ歌之是宗匠の家とも秘せ
られし詞にていへるとも云詞をもちて詞之手本とする
事ハ深くいひてをされをいふ様言葉つきと云義之

新拾遺集

くやしくも身をもわすれて新家のならひ神の岩戸のあけくれ
此集又至極の君の詞なり詞とハよくなる詞の心なし
是皆心をよく得たる詞と云くやしくをもおもひよりて
通して心ある然ハ讀る心を包む心をとなりしかしの定をも
し給ふ心得をは詞とて相しる事

為秀

言の葉のかよひしらぬ人の心のいかなのまゆのありと也侍し

是ハ心ある詞之只助語にてよろしく言葉にてあへし
建仁二歳　内裏歌合
秋虫の様なる聲へ(の)くもりてとりかやしく神のまよふ秋詞
是ハて詞と云てなき秋の詞之なくとも詞の聲へとも云
下にある秋の詞とよみてハ是も至極の作とよみ詞之
是や此詞と帰るを別詞とるともあての秋の実
後撰の歌ニハ別詞しまつられたりと歌のよみてとし之
定家卿百人一首ハ此の風に改て別也てハといひ置して
入もてりたるにとよみてなき秋故之定家卿の心にハ
歌一首全體の心あれハあしく思ふ詞の外にてハ
秋古風なるし尚あるまいの上にいまたなる之

續古今集

かくれぬの下はふあしのねくなけと人こそしらね神ハ知るらん

是をしりて道の心ハ得ると云人こそしらね神ハ知るらんとしると云

さる謂あり

右十一種の傳授無之して八傳の歌ハ詠るへし今ハ

心得道ひろく讀故歌の道歌のやうにて歌ハあるへき

多しとあり至極秘し申傳へし　あるへからん

持明院家入木道傳授

短冊書例

勅哥之事　主上御短冊　女房短冊

上皇御短冊　自詠短冊　無哥短冊

古歌短冊　罫懸短冊　散短冊

詞書短冊　題之事　經文哥短冊

追善附無常　下絵短冊　歌仙百人首哥

歌仙絵有短冊

○勅哥短冊を三つに折上の折め此下より書出損しする所に

切ばく為あり

○短冊ハくゝりめ三ツニ折て題の書たる方ハ内下之ニ
入て出ス折なくて題をよみたるあり
○歌を書て後ハ題を上ニして折かへして出ス事勅題ハ
格別あり
○主上短冊御諱不被書進ハ故上の句始末の中ニ紙ありし
て被進ハ是を又なかへ被進とも下の句も下へ入
て書る被進あり
○歌を書て後ハ題を上ニして折かへして出ス勅題ハ
格別あり
○主上短冊御諱不被書進ハ故上の句始末の中ニ紙ある
しかも被進ハ

○御製被進候上下の句平隠ニ被進あり
○上皇短冊下の句を上の句より一字さけて被進又平隠ニ
被進も有之御諱無之あり
○短冊書様ハ三の句墨継五句墨継下の句の留りを六
ケ字文字ゟ不書自詠墨継何連も同し法あり
上の句より下の句の留りを高く留る名字ハ上の留字の
出分へ余る様ニ書名字ハ小く不書行書ニ可書之
○上の句のおしめ字ある時ハ下の句をかに書是ハたゝいニ
書る短冊を不書前ニ必紙ニ而押し 上下ともに
ゆりハなし字ありハおしきあり
○女房短冊上皇ニ同し 但し書付ニ[illegible]

天子を指ていふ字ハあかれ

○自詠短冊上の折めへかけて書る時ハ二字あけたる字ハ不書まで勅宋の歌ハなをしかるへし然共二所かけ候ハあしく旧字にかゝる文字ハ令をく不書文字あり三字続くハ甚不宜なり

○無點ハ或ハ懐紙をよせて點を不書又ハ一字下の句をさけて書然共平仮名に書て可知なり

○古歌短冊下の句急角一字さけて書下の出るしるく不宜なり

○罫懸ハ白短冊に有上下に罫を引花鳥井家にハのけかゝけ隙て下へ続けて書二条家ハ宗三へけて書る也古の浮家ハ下のけ切て書なり名字を下の罫の下にて中に書る代二条家のこく書然共花鳥井家の心持也

○短冊何首にてをも一座杯のを一座つゝけて上の句を中へかせて書是ハ短たるハ然共つんまる紙故に能程よき可書なり

散短冊自詠に有かし折しる心なり 散様ハ三字二字一字とよ様に末を字ちくすて可書

三字 ――
二字 ――
一字 ――

此歌ちらしてよし 名字ハ下ノ中に書

○懐紙書ハ點の書ぶりを出造をあけ様ニ可

○歌に字歌ありハ二字宛にわくへし [illegible]

歌ハ　君通書　庶　林の故あり

○經文ハ歌に普門品林の歌あり歌ハ秋の上の句の下と下の

句の下名宗と上の句なりと同し様よろしく書へし

○延若紫を上に書と人見悟く必上に書まをわれ

是のかりなる将有延ハ紫を上に書たる也すて書紫

或ハ南庭年是抔をも書色上に書して書へし

し紫を上に書事ハあまりせぬ事と

○並常と歌ある時ハ紫を必上にして書へし

歌ハ古の歌但合ある其外も南庭の歌よし秋

[illegible]常抔と外歌ハとり[illegible]の歌[illegible]

し古の歌秋[illegible]古今歌を合[illegible]

[illegible]歌といふなり

○下絵の事蝶鳥の抔ハ眼代書消以様く書く見良の下

絵よハ繪抔墨まてとも[illegible]筆細く書けるぬ様

[illegible]目源を下絵あるし書てとも不悩之

○歌仙百人一首抔天智天皇と歌の所に書て歌ハ行

書く常の短冊様に書くも絵より八ちらし書に見る

ともあり

○歌仙絵ある八短冊の下に人形の頭西の通を除き上へ

通をあけてちらしたれあり

○人より就れ短冊に紫ちらり上下[illegible]まるて

ありて近年ハ据の歌を書ものなり

以上

懐紙書法

○懐紙俳諧節会程略て書和歌の二字送書られ
書る歌と平服若衆ハさうろう之

○字紙上下ニ必紙續ゝ墨池口傳なり

○俳諧季書有者御製衣の懐紙季書せし或ハ法中ニ
季書せし格別の故也詠何前和歌と斗書ものも別
業の人歌と書上者林もの添と書なり

○俳諧吾より下者又ハ庶子家門并林の方ニての懐紙ハ
季書なしニ詠何和歌とあり書必法中より知らるゝ之

○今始めし懐紙ニ常の懸ニ用候の字不ゝ近ハ詠歌の
門ニ者の字ゝ或ハ人林の字をもちし書なり

○俳諧下者ハ大抵季書を書同と調へて然ゝ去門同とす
字ハ容別あるも人一座ニ有しめハ字なり

○懐紙五首以上ハ二枚ニ調へ二枚めハ懸ゝ歌の上の句ゟ次紙へ
書付ハ懐紙ハ続ゝ詠首ハ不続は五首已上ハ二行書こ

○近時の懐紙奥をも不必なり

○近時の懐紙懸ゝ歌の下若衆と宗旨を揃へ書なり

○詩の懐紙ハ方歌と同あり去門　門恩林の[illegible]
肉[illegible]

○懐紙に君同日抔とあるにて書しかしはじまる十の字出来れハ又九十九三と字織(?)へと九字を八字十字を九字にとん合調へとてすてを八送り不書なり
○懐紙上下ちらし書かにかゝりてとん合調へとなり
○法中詠草の字書出し候ハ文よりする一字さげて書なり
○晴の懐紙とよふして今ハ希なり
○懐紙禁庭月明抔の題関字云々なり
○朝庭殿中抔にて君抔と云ふ字ハ行の上へ送り上て書之
○僧侶詠草の字能中大く書和歌の歌の字同形なり

以上

天子 一尺五寸 大高檀紙
大臣 一尺三寸
納言已下殿上人 一尺二寸
地下人 一尺二寸の内

集書格

集書ハ表紙のみならず紙二枚除て三枚めの裏の端より出しそれなり
物語ハ三枚めの表の端より出しそれなり

伴ふ物語ハ手紙にて 撰集にしく書出し外題を
物語外にしく押紙集の外題ハ横ミ押紙なり
集の行ハ半序跋を偶にして其文より一行さくなくれ
物語の行ハ偶にして序跋を一行さく半に書く
草紙の歌の末少し書たれハ是にならひて付るなり
集なりとも物語にても草紙の歌ハ句の末代わりしなり
古今にて序の字眼れ字まじるにて書時ハ墨を継てかわる
にて書小様ハ墨継えん標細く可書なり
長歌ハなんに可書なり
物語の内を草紙なりとも出すハ詞のうちへ歌を書也
源氏なとの類なり

源氏外題などの文字ハ交へ大振ゆゑに上下を
つめ候に程へよれ心書たれなり
集の外題を懐して文字に細く伴ふ物語を同なり
又濫外題を集の外題より少さげて書物別の外題
下へさげれ集の外題ハ少し上げて書なり
草紙抄録の名字の継を隠す事同しくハ継のなくにて
て出るなり
歌仙の外題ハ歌仙と不出三十六人歌合と出す所の歌合
是に唯れ女房三十六人新三十六人歌合抄調へしと
外題の寸法なとのたけ三折を二折ほ幅横六折を一
折となり

外題集のわきたのこしらへ少し多く略して抑之

以上

扇子書式

あふきにハ歌出すにハ貴賤の依ありて八表に一首出す所依の
賤の出す歌を可時ハ撰集の内よりも古延の歌一首撰
集乃外ハ不書但し六家集ハ四季之名扇に歌と可時
にハ三代集の中の歌をとて出すなり
扇の依分に限りて相応に歌可時ハ中の歌をとて書さるへし
為なり

扇に歌書にハ扇の骨を除て三折めより書出し但し
骨を除くも上下とも一行宛低く一首も骨を
除ハ歌をよくみん為なり初歌の出所一その時ハ骨より
入行め二首三首の時ハ骨より三折めにて出すべし

○扇面に詩歌を出す時ハ詩の後の一首
歌をあらはし出然ハ詩歌ともに一同に似合やう
にと調へるなり

○うちはハ歌を不出詩を書詩ハ朗詠集定りなく
作を出すなり

○ちらしの字数ハ左をのはして出右ものはしてハ大ハ三字
二字揃えて出書所ハ字ちらすなり一字二字三字ほと出之

○ちらし八中ほとなる所へ口方一つ宛尓見ゆるやうにみせして
出る書出し大く出し候熱してよく見る様にちらし
書あり
○て尓葉小く詔へ添而てと出あり
○色紙の詩歌八ちらし合る様尓織出あり
○詩歌を書所ゟ行書出あり
○歌合出の時八大底のちらし八人を出る故各別のちらし
詞へ書あり
○熱して形の物ハちらしま形を熟して一つ宛尓見ゆる様
尓詞へ为三角の物ハ角をよけて詞へ書也

出葉扱終

渓鶯

鶯も谷の出しよりさそふ春あるとおく鳴らし　宗渓

幸竹庵

あるハ竹ぬきそても心く鳴風の旅かり庵ぞ萩の山から

月前萩

咲梅の花のあたりに見る月ハ庵よりぬ影てもあめきにかすり

月前霞

月影もたえしあひける霞こそ風に打ちかくさも桜花しきる

海路霞

沖津風さそふ小舟もかくれて波の上かりそめの一村

暁見渓舟

海士の子よるのいさり火影淡く鐘の音に波のあなたの暁

切恋　澄月

つゝみそも月むくふしい青過ぬ今しさて恋の母父の後の世やうき

山路枯野　望文

村雨ハあとの山路に晴てしも分け行ぬ神に枯風そふく

花　宗流

咲しより咲ぬ花を見るもの吹ぬつの花の春しる

寄文

塩の子の笛の音も今咲梅の春や風にちる春ぞとなく

春の夜を語る人さ道やなきされて人と相逢て

大きなめしうしなひと出かけてむしのふそてよあき

信房

ありしよ百とせあまり庵しめける君の跡
不二の根のみどりの色はいまもなほこのことのはに色をとゞむる

澄月

武蔵野に続く旅の筆すさみを見るに其人の不二の
根高羽根のめうた 宅家の厳之人ゑ賢に恥るハいかあり
年の勤め部にわり入道し給ひてより母に
年もとりしことにかハ修行の道に情を結びて
よろこし職事に仕へまつり
ふたりのやむごとなきにつかうまつる身を手段をさへや捨てありくべき
職事はすなはちと天下のせわ一をれ一朝に御勤あるべき

宅長卿はかねて御返事あり
此ふたりハやまひとかくして帰りし葉大毛の大なる家也